mediopos 35

2017.3.15 ～ 2017.4.8

【神秘学ポエジー～風遊戯　第 75 集】

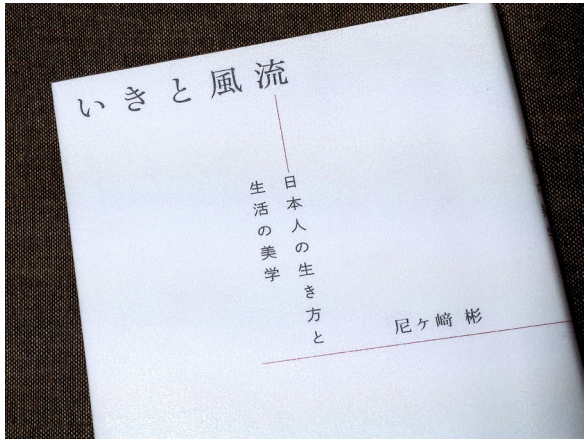
media-poesie ヴァージョン

mediopos851-875

神秘学遊戯団

mediopos-851
2017.3.15

■尼ヶ﨑彬『いきと風流／日本人の生き方と生活の美学』（大修館書店　2017.2）



「「おしゃれ」とはなにか。「センス」とはなにか。「流行」とはなにか。
　経済的損得を優先する人を「金にきたない」と軽蔑し、公正さを優先する人を「きれい」と尊敬するのはなぜか。物語の主人公としては利己的な人よりも自己の利益を（場合によっては命さえ）かえりみない人に共感が集まるのはなぜか。自分はそんなふうにはなれないのに。
　犯罪者（盗賊とかやくざとかテロリストなど）を主人公にした映画が無数にあり、しかも観客がそれらを「カッコいい」と称賛し、続編が作られるほど人気が出たりするのはなぜか。
　なぜ「カッコいい」が賛辞となるのに、「カッコつける」と笑われるのか。
　たぶんは人が他人を見るときには、そこに「生き方の美学」を探る視線があって、ひとびとは「美学」に従う生き方を見るとつい評価してしまうのだろう。ちょうど自然を見るときに美を探る視線があり、美しい景色を評価するように。同じようにある人の生活のために選ばれた事物、室内空間とか衣服とか食器などのデザインもまた、その人の生活の「美学」の現れとして評価されるのだろう。
　これら「生き方のスタイル」や「生活の中のデザイン」の問題に答えるものが「生き方と生活の美学」、あるいは「生きるための美学」である。（・・・）日本人はその時代ごとにこの「美学」を表す言葉を持っていた。「風流」「みやび」「数寄」「婆娑羅」「わび」「さび」「いき」などだ。これらはある種の生き方を表すと同時に、物品やその使用法の美的な特性を表す言葉であった。」

器には
器にふさわしいものを
それがひとつの美しさかもしれない

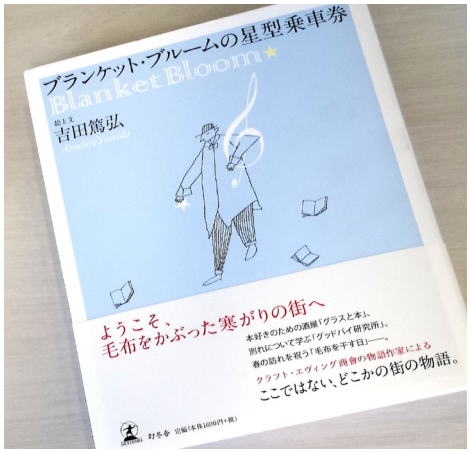
知的に見せようとすることが
むしろ痴的になってしまったり
カッコよく見せようとして
むしろカッコわるくなってしまうのは
たぶんあまり美しいことじゃない

時代には時代の美学があるけれど
時代に合わせようとして
流行を追っかけるのは美学にはならない
ひとまねの美しさで飾って粋がることが
決して粋にはならないように

けれども少しだけ無理をしても
自分の器を超えようと
人には理解されないだろう理想を
ひとり追いかけ続けること
それは魂にとって美しい生き方になる

mediopos-852
2017.3.16

■吉田篤弘（絵と文）『ブランケット・ブルームの星型乗車券』（幻冬舎　2017.3）



（h s6.BLANKET LAVA ＜グッドバイ研究所＞より）
「テーマは「別れ」である。といっても、さほど深刻な話ではない。＜グッドバイ研究所＞を利用する者の七割は何の屈託もなく「別れ」について学んでいる。＜相談所＞ではなく＜研究所＞であるところが重要である。
　研究所が重視しているのは、「じゃあ、また明日」と笑顔で手を振る日常的な別れをめぐる諸々である。これを「小さな別れ」と研究所は呼んでいる。「別れ」と聞かされると、つい「大きな別れ」ばかり連想しがちだが、考えてみると、日々、われわれは「小さな別れ」を繰り返している。小さいゆえに「大きな」に比べてほとんど取り沙汰されることがないが、最近、若い人たちから「小さな別れ」の別れぎわに「どうしていいかわからない」という声が数多く聞かれるようになった。
　「なんだか気まずい空気になって-----」
　この点を検証してみると、そこに自ずと浮かび上がってくる問題がある。研究所の代表であるブランケット・ハウザー氏の見解はこうだ。
　「どのように出会って知り合うか。そしてどのように理解し合うのか。それはとても大切なことです。自身の経験に基づいてノウハウを説く人も沢山いるでしょう。（･･･）しかし、別れについてはどうでしょう？　われわれはあまりにも別れというものに対して見て見ぬふりをしてきました。ですが、本当に学ぶべきものは別れの方にこそあります。」
（･･･）
「別れというのは。じつのところ物理的なものに過ぎません。簡潔に言いましょう。それは寄り添ったふたつのものが離ればなれになって、ひとつひとつになるということです。これこそ重大な事実です。別れたことで実感する『ひとり』の感覚こそ、われわれ本来の姿なのです。しかし、現代は携帯電話やメールで頻繁にやりとりすることで、『別れ』の感覚を得難くなりました。おそろしいのは、こうした＜小さな別れ＞を経験することなく、いきなり＜大きな別れ＞を強いられたときの衝撃でしょう。（･･･）しばりの別れを繰り返すことは、臆病な生き物であるわれわれが学ぶべきレッスンのひとつなのです。」

こんにちは
さようなら
こんにちは
さようなら

そのふたつのあいだで
幾度も幾度も手は振られ
杯は交わされ
花に嵐は吹き荒れる

こんにちは
さようなら

ひとりが
ふたりになり
ひとりとひとりになる

出会うことは別れること
始まることは終わること
生まれることは死ぬこと

世界がある
私がいる
その謎のまえで
ひとはときに途方に暮れる

けれどそれは
つかのまの物語
永遠のなかでは
アルファはオメガであり
１が２になり
やがてまた１という
無限に帰還するのだ

こんにちは
さようなら
こんにちは
さようなら
ひとりとふたりの
永遠の物語

mediopos-853
2017.3.17

■田口章子編著『日本を知る＜芸能史＞／下巻：生命の更新』（下巻）（雄山閣　2016.12）

「朝鮮も含めた大陸文化が天の信仰を核心に形成・発展したのに対し、日本は、地、つまり大地の信仰を中心に文化を形成・発展させてきました。芸能と芸道を考える際の根本視点です。天の信仰は、天、さらに北極星に象徴される星辰信仰です。」
「はっきりいえることは、天の星辰への信仰は中国北方の遊牧民族が育てたものであり、南方の農耕民族は、天の神、天の星辰への信仰を持っていないという事実です。（･･･）
　天・星辰の神々が「天神」として最上位に位置させられています。（･･･）
　他方、いわゆる大地の神々は「地祇」として最下位に位置づけられています。」
「日本では星の神は悪神です。
　古代の固有の星辰信仰に、大陸から伝来した星辰信仰がかぶさってきました。北斗七星・九曜星・十二宮・二十八宿などの信仰が密教・陰陽道・修験道・日蓮宗などと結合して日本人社会に定着しました。善神とされるこれらの星辰は大陸から伝来したものでした。
　日本の本来の天の神信仰や星辰信仰は中国南部の農耕民と類似性を示しています。天神（男神）よりも地神（女神）信仰が中心となっています。太陽や月の信仰は古くから存在しましたが、中国南部と同じく大地の神々と観念されていました。アマテラスに象徴されるように、地上で誕生したのち天にのぼり、また地上に還る神と考えられていました。
　星辰信仰の大勢は観念として大陸から渡来し、実生活との関係は希薄でした。（･･･）
　このように、大陸と日本の、天、星辰の信仰の相違をみてきたときに、大陸の文化が天の信仰と結合し、日本の文化が大地の信仰から誕生したことが、当然として納得されるのです。」

星辰は精神にして
人は星を仰ぎ
みずからの由来を求める

大地は胞衣にして
人は地に祈り
みずからを育む大地に抱かれる

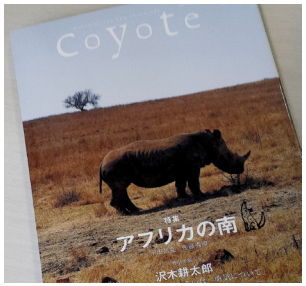
天と地が争うとき
天は地を閉じ込め
地は天を恨み
天と地は引き裂かれるだろう

されど天からの知恵と力が
地からの知恵と力とむすぶとき
真の知恵と力は生まれるだろう

天は地に生かされ
地は天に生かされ
天と地は逆対応としてむすばれるのだ

mediopos-854
2017.3.18

■沢木耕太郎「リングの彼方----あるいは、勇気について」より
（coyote No.61 Spring 2017 特別寄稿）



「「ボクサーに大事なものって何だろう」
　少し考えてから、私は言った。
「自由になろうとする強い意志、じゃないですかね」
「どういうこと？」
　そう訊かれて、私は頭の中を整理しながら答えた。
「リングに上がったボクサーは、どっちがより自由に振る舞えるかを競い合っているんだと思うんですよね。自由に動き、自由にパンチを振るい、自由に当てる。そして最高に自由になったとき、相手を倒すことができる。たぶん、トレーニングというのは、相手より少しでも自由になるためのものなんじゃないのかな」
「なるほどね。でも、それはアマチュアの段階のボクサーだという気がするな」
「プロのボクサーに必要なものは？」
　今度は私が訊ねる番だった。
「勇気だと思う」
「勇気？」
「そう、勇気。恐怖を抑えて、リングに出ていく勇気。打たれても打たれても前に出ていく勇気。それで倒されるかもしれないとわかっていてもパンチを振るう勇気」
「勇気・・・」
「お客さんはその勇気を身にくるんだと思う。その勇気にお金を払ってくれるんだと思う。自由になるというのは自分のためのもの。アマチュアならそれでもいい。プロはお金を貰ってお客さんに見てもらわなくてはならない。お客さんはボクサーのその勇気に金を払ってくれていると思うんだ」
　私は林さんの口から出てきた「勇気」という平凡な言葉が、これまで覚えたことのないほどの輝きを帯びていることに驚いていた。
　あるいはそうかもしれない。プロのボクサーに必要なものは、何よりもまず「勇気」なのかもしれない・・・・・・。」

地上を生きるために
大事なものは何だろう

どこまでも自由に生きたいと思うが
そうであるならば地上で生きたりはしないだろう

四苦八苦ばかりの地上で生きたりはしないだろう
つかのま輝けたとしてもそれはいつまでもは続かない

勝ち続ける者は決していないように
負けないまでもやがては引かざるをえないように

もうひとりの私は
この地上の私に何を求めているのだろう

それはもうひとりの私には
決して得られないもののはずだ

地上の私は苦しむのだ
地上の私は悲しむのだ
地上の私は恐れるのだ

勇気が必要だ

自由になるだけなら地上はいらない
もうひとりの私はすでに自由なのだから

けれどもうひとりの私は
高次の自由を得たいと思ったのだろう

そのためには勇気が必要だ

苦しみながらも前にでる勇気が必要だ
悲しみながらも前にでる勇気が必要だ
恐れながらも前にでる勇気が必要だ

mediopos-855
2017.3.19

■佐治晴夫＋松岡正剛『二十世紀の忘れもの／トワイライトの誘惑』（雲母書房 1999 年 1 月）

「佐治／物理学や数学にかぎって言えば、相対性理論や量子論とかいうものによって得られた人間の「知」、最先端の「知」による人生観というか自然観というものを、たしかに声を大にして言わなかった、あるいはそれを言った人がいたかもしれないけれど、それが浸透しなかった、ということにおいて、二十世紀はちょっと失敗だったかなというのは、同感ですね。」
「佐治／私が感じるのは宇宙の本質がどうのこうのなんていって、偉そうに見えますけど、たとえば何かすごいものというのは、こういう日常性の隙間に見え隠れしてあるんじゃないですか。それを私たちは研究していて、直観的に「あっ」と感じるわけです。（･･･）コップならコップだけではないんですよね。コップとその周りのものとの間に本物があるんです。日常の事物の間の隙間から宇宙が見えるんですよ。そういうことができたらいいなという私の夢があってね、松岡さんとお話をしている間に、ほんのたまゆらの一瞬ですけれど、そういうのがピッピッと感じられたのはすごく幸せでした。」
（松岡正剛「あとがき」より）
「二十世紀はデキのよいものばかりを発明し、また大胆な開発をしてきたが、それを存分に理解させることは怠ったように思う。そのため量子力学も超数学も、ダダもアナキズムも十二音階も、その本質を咀嚼できないままに終わっている。おまけに核やクローンや環境汚染については、時代はただただ傍観するだけになっている。次の時代には再編集が迫られることになるだおる。また、そのときは二十世紀だけを編集するのではなくて、歴史そのものの再編集が大きな課題になるだろうと思われる。」

輝かなくなった未来を抱えて
二十一世紀は歩き始めている
智慧と技術はとうに切り離され
技術ばかりが高速化している

智慧の水の在処に気づいた者は
そこに井戸を掘り渇きを癒やし
人にも知らせようとする
けれども水を飲むためには
自らが井戸を掘らねばならないのだ

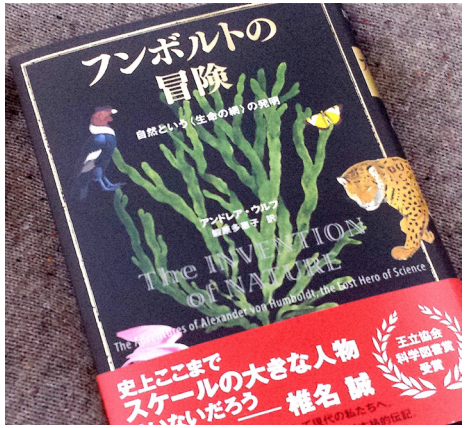
技術という器は
その作り方を教えることができるとしても
それを満たす水は
みずからが見いだすほかに得ることはできない

すぐれた器を競い誇りながら
水を与えてもらおうと
渇いた魂が群れをなし彷徨うが
自らの井戸を掘らない者に水は訪れない

遠く旅する必要はない
過去に求める必要もない
未来を待つ必要もない
今をただ両手で掬って飲むだけなのだが

mediopos-856
2017.3.20

■アンドレア・ウルフ『フンボルトの冒険／自然という＜生命の網＞の発明』（鍛原多恵子訳／ＮＨＫ出版 2017.1）



「アレクサンダー・フォン・フンボルトは、英語圏でほぼ忘れ去られている。彼は最後の博識家であり、科学が専門領域に細分化されようとした時期に他界した。したがって、芸術、歴史、詩歌、政治、そして科学データを駆使する彼の全体論的な科学的手法は、当時の流れと相容れなかった。二十世紀はじめまでには、さまざまな学問領域にわたる知識をもつ人物に活躍の場はなくなっていた。科学者が狭い専門領域に閉じこもり、さらに細分化が進む中で、彼らはフンボルトの学際的手法と自然を地球規模の力と見なす概念をどこかで見失ったのである。」

「彼の人生は多事多難で冒険に満ちていたのみならず、彼の物語は私たちが現在のように自然を見るようになった理由を教えてくれる。科学と芸術のあいだ、主観と客観のあいだに明確な線を引く世界にあって、自然を真に理解するには想像力が必要になると考えたフンボルトの洞察には先見の明がある。

　フンボルトの信奉者たち、そして彼らの信奉者たちは、彼の遺産をずっと伝えてきた。静かに、秘めやかに、ときには自分でそれと知らずに。こんにちの環境保護論者、生態学者、ネイチャーライターは、たとえ、その多くが彼の名前を知らないにしても、フンボルトのものの見方に多くを負っている。フンボルトこそ彼らの開祖なのである。

　科学者が気候変動の全地球的な結果を理解し予測しようとする時代にあって、科学と自然に対するフンボルトの学際的アプローチは、これまでになくその重要性を増している。自由な情報交換、科学者間の協力、学問領域間のコミュニケーション強化は、こんにちの科学を支える柱である。自然が全体論的なパターンの一つであるという彼の概念が、私たちの思考の基盤となっているのだ。」

「フンボルトは「自然の秩序を乱す人類の害悪」について述べている。彼は人生の中でとても悲劇的になった時期があり、人類がやがて宇宙に進出し、悪徳、強欲、暴力、そして無知という破壊的な性質の数々をほかの惑星に広めるだろうという悲劇的な未来を予測したことがあった。人類が地球にすでに諸悪を広めていた一八〇一年という早期に、フンボルトは人類が遠くにある惑星さえも「不毛」に変え、「荒廃」させてしまうかもしれないと書いたのである。（･･･）

　ゲーテはフンボルトを「際限なく水が湧き出る孔がたくさんある噴水」になぞらえた。だから、「私たちはその下に容器を置くだけでいい」というのだった。

　その噴水はついぞ涸れたためしがないと私は信じている。」

一は多となった後
やがて一へと
帰還しなければならない

言葉は互いを理解できないほどに分かれた後
沈黙を経て
イデアへと帰還しなければならない

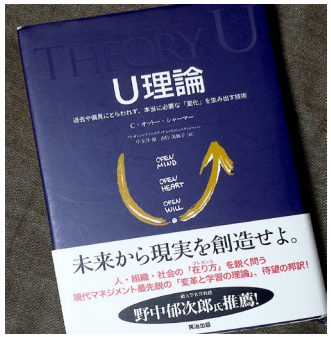
自然はばらばらに切り刻まれ細分化された後
その生きて働く全体が
見いだされなければならない

帰還するためには
果てない旅を航海する冒険者が必要だ
嵐は行く手を遮り
怪物たちは襲いかかるだろうが

帰還したときはじめて
世界は多という鏡に照らし合わされる
網の目として現れるだろう

mediopos-857
2017.3.21

■C・オットー・シャーマー『U理論／過去や偏見にとらわれず、本当に必要な「変化」を生み出す技術』(英治出版 2010.11)



(ピーター・センゲ「序文」より)
「残念なことだが、社会的な場はめったなことでは進化しない。家族にしろ、チームにしろ、我々の通常の意識では社会的な場の存在に気づかないからだ。変化への可能性を秘めた力が存在したとしても、それに反応するのに精いっぱいで、真剣に取り組もうとしない。何か問題があれば、お定まりのメンタルモデルを「ダウンロード(棚卸し)」して問題を解釈し解決法を探す。」
「U理論の重要な特徴は、開かれた思考、開かれた心、そして開かれた意志がすべて一つとなって分離できない全体としてつながっている点にある。三つのレベルがすべて開くとき、学びの質に深いシフトが起きる。有名な学習理論のほとんどは過去から学ぶことに主眼を置いている。つまり、すでに起こってしまったことからどう学べるかに注目するのだ。
　こうした学び方はつねに重要だが、現代のように大きな変化が生まれつつある時代では、到底それだけでは十分とはいえない。そこで、まだよく知られていないが新しい学習方法が求められる。シャーマーはこれを「出現する未来から学ぶ」と表現する。出現する未来から学ぶことはイノベーションには不可欠だ。出現する未来から学ぶには直感が必要だ。非常にあいまいかつ不確実な状況を許容し、失敗を畏れないことが求められる。想像もつかないようなことに直面し、不可能なことを試みることを覚悟しなければならない。我々は恐怖と危険を感じつつも、これから出現しようとするきわめて重要な何かに貢献しているのだという気持ちによって、前進を続けることができる。」
「U理論とその方法は、大きな根本的な変化を迎えつつあるこの時代にあっては特に、リーダーシップの本質に深く関わっていることに触れておこう。このリーダーシップを発揮するのは「上層部」にとどまらず、あらゆる人々である。なぜなら真のイノベーションは新しい考えをただ語ることではなく、これまでとは違った方法で行動することから生まれるからだ。従来の考え方、習慣、そしてアイデンティティさえも手放すことのできる人々が、リーダーとなることができる。このリーダーシップが生まれるのは、人々が本来の自分を見出し深く結びつき、自分たちが最も大切に思うものを実現する未来を生み出そうとする変革に、自分が果たす役割を自覚したときであることを、強調しておきたい。」

変わることはむずかしい

　過去だけを学べばアイデンティティに縛られる
　成功体験しかり失敗体験しかり

変わることはむずかしい

　自分が変わりたくないときは
　人を変えて自分を担保しようとする

未知から学ぶことはむずかしい

　後ろに道は続いているが
　前に道はないからだ

未知から学ぶことはむずかしい

　あいまいで不確実なところでは
　恐れと危険を感じざるをえないからだ

未知から学ぶために

　じぶんという強固な壁に向かいあうことだ
　じぶんの井戸を掘り続けなければならない

未知から学ぶために

　みずからを開かれた場に置き
　閉じた回路を開かなければならない

未来を創るために

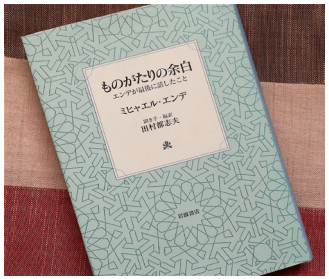
　未知のみずからに気づき
　その目覚めに手を貸すことだ

未来を創るために

　姿を現そうとする源の声に耳を傾け
　その音連れを迎え入れともに歌うことだ

mediopos-858
2017.3.22

■ミヒャエル・エンデ『ものがたりの余白／エンデが最後に話したこと』
（聞き手・編訳　田村都志夫　岩波書店　2000.2）



「ーーーー言語とはどこからくるのでしょう？　どこか神秘の深みからでしょうか。
　エンデ／言語は、精神世界の、どこから深みからやってくる。どの新しい宗教も、そのように説いていると思います。つまり、この目に見える世界は、沢山の段階があるなかで、最後の、いわば一番下の表現だと、あるエネルギー、あるいはある言語の、一番密度が高い表現だというわけです。
　わたしたちはこの世で、いわば一番密度が高いかたちで生きているわけです。しかし、その上には、たとえばカバラでは九段階ある。九つの世界がその上にあって、みんな異なるのです。特にこれほど密度が高くない。透過性がもっとある。
　こうも言いますねーーーー目に見える創造は、神の道の終わりだ、と。
　ーーーーそうならば、個々の人間の生とは一体何なのでしょうねえ？　ある大きな精神的なものに関与してはいるものの、個々の生、それ自体は消えてしまうそうなほど小さいのですから。
　エンデ／消えてしまうそうなほど小さい、そうかもしれません。でも、たとえばカバラが説くように、もしこの世が人間のためにあるのだとしたら、大小という概念は別な理解の仕方をしなければならないでしょう。
　人間が完全な孤独を体験できるのは、物体的な物質世界でしかない。この完全な孤独の体験は、人間が自立した存在になるために必要なことなのです。なぜなら、いわば他の種の力や威力がいつも身体のなかを流れている、もう一つの世界に止まるのならば、いつまでたっても自立しないのですから。
　つまり、いってみれば、これは必要な誤謬なのです。この世では、たとえば、わたしたちの存在は物的な身体の表皮の内に限られていると信じられている。こう信じることは、必要な誤りなんです。わたしたちは、この表皮に包まれているものだけにすぎないと、本当に信じることができる。
　もちろんそうじゃないことは、ちょっと考えただけでわかります。(･･･)
　しかし、ここではわたしたちは、孤立して存在しているという誤謬におちいっていられる。これは必要な誤りなんです。みんなそれぞれひとりぼっちだと信じているからこそ、あれやこれやと行動するのに、自分で決めることができるのですから。つまり自立した存在でいられる。」

ひとりぼっちってなんだろう

　（もうひとりの私は答える）
　じぶんで決められるってことさ
　ひとりで歩いてゆけるように

まちがったらどうしよう

　ひとりだと思いこんでいるのもまちがいだけど
　まちがえることができるってけっこうステキなことだぜ

ひとがなにを考えているかわからない

　みんなの考えがスケスケだったら
　ひととじぶんの境目がなくなっちまうだろ

ひとりとひとりとひとりとひとり

　ひとりとひとりだから
　愛することができるんじゃないか
　ときにはひとりがほかのひとりを傷つけさえしながら

ひとりぼっちってどこからきてどこへゆくんだろう

　宇宙もはじめはひとりぼっちで
　じぶんのなかからほかのひとりを創りたいと思ったんだ
　だからこの世界があって
　ひとりひとりがみんなひとりぼっちだと思うようになった
　でもほんとうはひとりはみんなで
　そしてみんなはひとりなんだ

mediopos-859
2017.3.23

■海道龍一朗『花鏡　室町嘆美抄』（講談社文庫　2017.3）

「世阿弥の奥書には、こう記されていた。

　然れば、当流に、万能一徳の一句あり。
　初心、忘るべからず。
　この句、三ヵ条の口伝あり。
　是非の初心、忘るべからず。時々の初心、忘るべからず。老後の初心、忘るべからず。

　奥書には、天見の極意についてなど一言も書かれてはいなかった。
　ーーーー初心、忘るべからず。・・・・・・最初の稽古の前に言い渡された言葉ではないか。
　氏信は細く長い息を吐いてから、ゆっくりと眼を開く。
　ーーーーこれが口伝奥義とは、何とも義父上らしい。これ以上に義父上らしい言葉も思いつかぬ・・・・・・。
　結局、あの舞台で何が起こったのかは、己自身で解き明かすしかなかった。
　世阿弥が残してくれた訓戒を胸に抱き、突然降臨した境地を解明し、氏信は己の編み出す更なる奥義へと向かわなければならなかった。」

心に果てなし
初心　常にともにあり

初心あるとき
そこに花あり

初心なきとき
そこに花なし

道に果てなし
初歩　常にともにあり

初歩あるとき
そこに智慧あり

初歩なきとき
そこに智慧なし

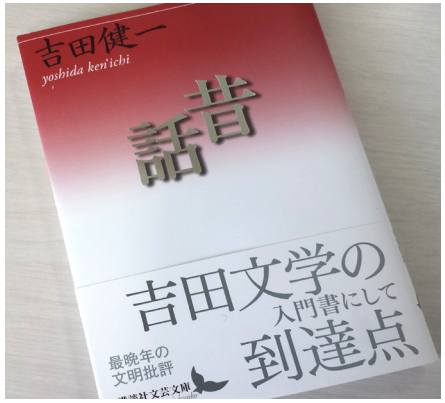
花に果てなし
秘した花　常にともにあり

秘した花あるとき
そこに永遠あり

秘した花なきとき
そこに無常あり

mediopos-860
2017.3.24

■吉田健一『昔話』(講談社文芸文庫　2017.2)



「過去にあったことは現在では完了しているから明確な形をしているというのは疑って見れば幾らでも疑えることである。」
「死んだ人間とまだ死なない人間の違いはそれ程大きなものでない。少なくともこういう意味ではでもし我々が聞かされる話に出てくる人間、或は我々が読む本や愛好する音楽の作者も我々の世界をなすものの中に入れるならばその世界は多分に死んだ人間で出来ていてその僅かな一部が我々とともに現に生きている人間である。」
「考えて見れば話という言葉に昔を冠するだけ余計であってどういう話でもそれが話になる類のものであるならば昔話であることを免れない。今をなしているものは昔である。又我々は未来小説と言った形でこれから先のことを語ったものがどれだけ退屈であるか皆知っている。その例外にヨハネの黙示録とオォウェルの「一八九四年」があるが退屈でない理由をこの二つに就いて求めるならば何れもこれから先のことと断って置きながらそこにあるものは今とその今をなしている昔、及びこれに対する語り手の情熱であってまだありもしないことに情熱を覚えるのは難しい。いつも今があると逆に言うことも出来る。その今というのが何であるかを思うならば話という程の話が凡て昔話であることは更に明らかになる筈であって我々がこの今というものに浸っている時に懐古の情も澆季の世の嘆きもあったものでない。併しこれはもう少し説明する必要があることかも知れなくて今が昔だというのは今の状態にあって今と昔が区別出来るものでないということなのである。」
「我々が一行の詩に動かされてその詩が作られたのが昔のことでそれに自分が動かされるのが今である時にこの昔と今に何の違いがあるのか。その詩は何れは又誰かを動かすも知れなくてそうするとそれが未来のことになるというのではそうした過去と現在と未来の区別は無意味なものになるばかりである。併し一度あったことが過去ならば我々の現在は過去に、今は昔に満たされていると見ることも許される。そうすると我々が過去に生きていることになるのだろうか。そうした妄想を妄想とも思わないのは過去を既に終わったものとすることから来ている。」

覆水盆に返らずというが
それがなにがしか意味をもっているというならば
ひっくりかえした水も返らない水も
終わってしまった過去のことではない

トラウマが働くのも
過去のそれではすでになく
現在のなかにあるからで
どんなに悩まされているとしても
どうにかすることができるのは現在でしかない
未来に向けてどうにかしたいというのも
現在においてそうであるのであって
現在から切り離された未来は意味をもたない

歴史が生きているというのも
終わってしまった過去ではなく
現在のことだからで
それは歴史にかぎらず
過去は現在のなかにあってこそ意味があるのだ
歴史的事実というものは一様でなく
現在のなかでさまざまな光に照らされている

昔話を語りたがる人も
すでに昔のことではなく
現在の話だからこそであって
死んだ人の書いた言葉を読むことも
読んでいるのは現在なのだ

小さな子供が繰り返し同じ話をせがむのも
老人が繰り返し同じ話をするのも
その同じということはまったく同じということで
はなく
同じなかに現在があるのであって
子供と老人の幸福な時間もまた現在にある

そしてすべてが現在にあるということのなかに
変化するということも含まれている
変化するということもまた現在だからである

mediopos-861
2017.3.25

■加藤周一『梁塵秘抄・狂雲集』(同時代ライブラリー　岩波書店　1997.8)

(「狂雲集」より)
「悟りは、認識論的には、主客合一であり、存在論的には、非個体化された自己と一体化した世界を、究極の現実とする。その唯一の現実は、存在と無、および時間の過去・現在・未来を超越する。しかしそれは、感覚的に与えられたこの世界の外にあるのではなく、この世界のあるがままの多様性に現象として現れる。その意味で「一は多であり、多は一である」。仏教用語で表現すれば、「性相不二」であり、本質(究極)と現象(相)とは別ち難い。また存在と無が超越されるから、「不生不滅」であり、「色即是空、空即是色」である。時間も超越されるから、「刹那即久遠、久遠即刹那」であり、比喩的にいえば「因果脱却」である。しかし本質における「因果脱却」は、現象における「因果輪廻」と、表裏相伴わなければならない。前者を知って、後者を知らなければ、それは「因果撥無」の禅で、悟りの落とし穴である。前者を知って、同時に後者を知ることの比喩的な強調が、「花紅柳緑」である。----およそこの辺のところが、誰の悟りにも共通の枠組みだといってよいだろう。
　大塔国師は、空間と時間の超越を、実に美しい簡潔な言葉で表現した。「億劫相別れて須臾も離れず、尽日相対して刹那も対せず」。超越的真理の直感が、総体的経験の世界と表裏をなすということを、道元はさらに美しい言葉で指摘した。「しかあれども花は愛惜に散り、草は棄嫌に生ふるものなり」。一休もまた永遠の今について、全世界の歴史も瞬間の出来事にすぎないといった。「大千起滅刹那間」。しかしまた超越的な世界の直感が、相対的世界との係りを決して消し去るものではないこともいったのである。「不生不滅仏難得　花約有無相対春」。」
「禅に徹底することは、自力の限界までゆくことである。一休はおそらくその力の限界において、どうしても解決できない対立につき当たった。破戒対持戒。「本来無一物」対「莫作諸悪」。永遠の今と日常の時間。超越的経験と歴史的社会的空間。絶対的な主観主義と宇宙の客観性。もしその解決が自力で不可能ならば、その先には「他力本願」の世界しかないはずだろう。故に「賛法然上人」にいう、「教智者如尼入道」。智者が尼入道の如くなるのは、「自力」の限界における「他力」への実存的転換である。(・・・)
　一休が実際に衣を更えて浄土宗に入り、前年に賜った大塔国師の頂相を返却したかどうかは、あまり大きな問題ではあるまい。まことに多きな問題は、もしそうしたとすれば、何故そうしたのか、たといそうしなかったとしても、何故そういう詩を書いたのか、ということである。禅僧がまさか冗談に浄土宗に入るという詩を作ることはないだろう。浄土宗への彼の関心は、自力の限界に他力の意味を感じとったからでなければならない。そのときはじめて現れる「他力本願」の意味は、禅宗の枠を超えて仏教の本質に近いはずであり、おそらくは仏教の枠さえも越えて、一般に宗教的なるものの核心に近いはずである。」

いまここにいること
そのものが花

けれども
求めれば求めるほどに
花は私から離れ
遠ざかっていき

去ろうとすればするほどに
花は私のほうへ
近づいてくる

花を咲かせることはできない
花は生かされているのだ
私をあらしめることはできない
私は生かされているのだ

知り尽くすことはできない
知はやがて壁となる
知を放下したとき
壁は鏡となり
みずからの映る顔の奥に
花は咲いているのだ

mediopos-862
2017.3.26

■エハン・デラヴィ『スーフィーの賢者　ルーミー“その友”に出合う旅』(VOICE　2010.4)

「自由とは、やりたいことをやれるのが自由というよりも、むしろ自分自身から自由になるということだろう。言い換えれば、自分自身がスピリチュアルな自由への最も大きい脅威になっているのだ。エゴは言い訳を常につくり出し、私たちを究極の奴隷にしてしまう。エゴは、実にクリエイティブな方法で、真の自由を手に入れようとすることに対して妨害を加えてくる。」
「ルーミーは、イスラム教徒としての伝統を捨てるようなことをせず、その中に生きながらも、それを超越するに至った。イエスも同様に、彼が生まれ育った土地のモーゼの法に従った伝統や監修を尊重しながらも、霊的な革命家として実践的であった。だから彼は、安息日に禁じられていた癒やしを人々に施した。イスラム教徒にも同じくシャリーア（聖法）に基づく厳しい義が存在している。しかし、義だけでは人間は生きていけない。だからこそ、神秘主義の黎明期に生まれたアブラハム信仰では、王や人間ではなく、唯一神のみに従うことを教えていた。そして、もし私たちが内なる“その友”に従うのなら、義など必要としない。(･･･)
　ルーミーは、自由についてこう述べている。

　君の靴が窮屈だから、君は閉じこもってしまう。
　夜眠る前に、その小さな靴を脱ぐことで、魂は知っている場所に解放され、夢はさらに深く君を導くのだ。」

友よ
道徳という戒律は
いったいどこから来たのか

友よ
戒律がなければ
殺し盗み傷つけるというのか

友よ
戒律が必要なのは
自らを縛らなければならないときだけだ

友よ
だれがだれを
奴隷にしているのか

友よ
人はみずから進んで
奴隷になりたがっているのか

友よ
自由と奴隷が
区別できなくなってしまったのか

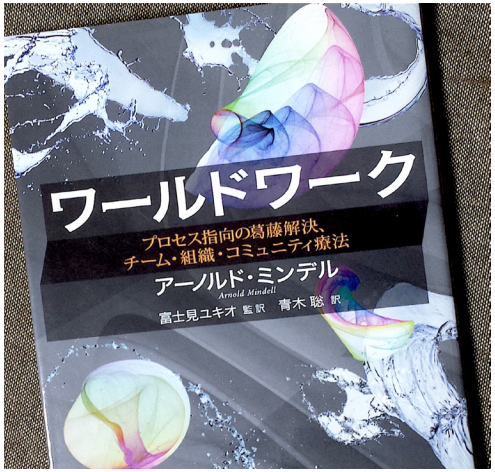
友よ
自由とはみずからの源に
立ち返ることのはずだ

友よ
戒律を愛へと変容させたときに
それが自由と呼ばれるのではないか

友よ
愛せよと命ずることはできない
人はみずから愛になることしかできないのだから

mediopos-863
2017.3.27

■アーノルド・ミンデル『ワールドワーク／プロセス指向の葛藤解決、チーム・組織・コミュニティ療法』（富士見ユキオ監訳・青木聡訳　誠信書房　2013.11）



「葛藤の中にいるすべての人（役割）が助けを必要としている。そのような状況では、私たちみんなが弱者であり、トラブルに巻き込まれている。私たち人類は小さな地球の中で、ファシリテーターの可能性をもった唯一の存在であるが、私たちの信じている立場のために戦い、しかし全体のためにも戦い、そして他の立場からのコミュニケーションに開かれるために戦うことが、最も安全な立ち位置である。私たちは全体の味方をしなければならない。なぜなら、あらゆる部分がそれ自身を表現出来たときにだけ、全体が慈悲深く、そして賢明に働くからだ。ある立場の見方をして全体を忘れる私たちの傾向が、全体を傷つけるということを認識する必要がある。

　あるひとつの部分だけを好む・味方することが重要で、実際的であったとしても、ひとつの立場だけが支えられるだけでは、グローバルな場は機能しない。相対論的な場には、絶対的な善の部分あるいは悪の部分はない。絶対的な「善」あるいは「悪」とは、あるひとつの立場の感情論である。葛藤におけるひとつの役割が「善」であると信じることはあまりにも単純であり、その立場だけを味方することは、全体を混乱させる。（・・・）私たちは、自分が信じている立場を支えるだけでなく、同時にシステム全体を支えることを学ぶ必要がある。」

ひとりのなかに葛藤があるとき
みんなのなかにも葛藤がある
ひとりはみんなに照らされ
みんなはひとりに照らされてあるからだ

ひとりのなかの善は
みんなのなかの善を照らし出し
ひとりのなかの悪は
みんなのなかの悪を照らし出す

強者は弱者を照らし出し
弱者は強者を照らし出し
強者のなかの弱者と
弱者のなかの強者もまた照らしあう

ほんとうはひとりがみんなのために
みんながひとりのためにあるように
無数のモナドの円は照らしあいながら
ひとつのモナドとして円を描いているのだ

mediopos-864
2017.3.28

■小西甚一『宗祇』（日本詩人選 16　筑摩書房　昭和四六年十二月）

「有機的な感興を重視しない享受態度は、能のばあい、基本的に肯定される。とくに世阿弥グループが確立した様式の能（『野宮』『杜若』など）においてそうである。筋や構成がどの曲も大同小異であり、プロットの起伏や波乱はほとんど問題にならないが、下って観世小次郎信光あたりの作（『船弁慶』『紅葉狩』など）になると、筋のおもしろさが比重を大きくする。まして、オペラのばあいは、いっそうその傾向が強いといえる。（・・・）ところが、連歌においては、有機的な感興がきわめて限られた在り方でしか期待されない。というのは、連歌における有機的な感興の生じうる範囲が二句の間に限られ、全体を通じた意味の展開が無いからである。

　連歌での付合は、厳重に二句だけの間と規定されており、ぜったい三句以上にわたってはならない。たとえば、第三句と第四句とは付き、第四句と第五句とは付くけれどおm、第三句と第五句とが関係してはいけないのである。もし第三句と第五句が意味のうえで関係をもつなら、それは輪廻であって、きびしく排除される。連歌の根本原理は、すなわち「もとに戻らないこと」である。「行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にはあらず」というイメジェリは、連歌のために案出されたのではないかとさえ思われるほどだから、意味の操作にもとづく感興は、二句単位でしか存在できない。（・・・）

　その「もとの水にあらず」という流れが、偶然性を契機とする流れであることは、いっそう有機的な感興を制限する。」

「連歌から偶然性の契機を抜いたら、もはや連歌ではありえない。しかしながらまた、連歌はまったく偶然だけに依存するわけではなく、偶然的な流れを統御し、ある種の秩序を与えようとする志向が、連歌を「芸」たらしめる。」

「どうなってゆくか予測のつかない偶然性の媒介により付け進められる連歌の表現は、見たところ整然としていないけれども、不整でありながらふしぎな調和と均衡に支えられた見えざる秩序をもつ。「見えざる」とは、漢詩における起承転結のような軌範として存在しないという意味である。序破急は、もととも雅楽の述語であって、楽章の構成区分につけられた名称だが、能では構成区分であると同時に速度の進展をも加味した意味に用いられている。連歌における序破急も能とだいたい同様で、初折の表八句からその裏の第二句まで併せて十句は序とされ、つとめて格調たかくなだらかに詠むべきで、印象の際立つような句材を用いてはならないと定められており、初折の裏の第三句から三の折の裏第十四句までは破とされ、波瀾曲折をつくして感興ふかく詠むべきだが、名残の折は破で、この辺までおもしろい付合を追い求めていると、全体の落ち着きが良くないから、なるべくすらすら運ぶべきで、とくに名残の裏はさらりと納めるのが心得になっている。」

歌は連なりつつ
もとの連なりを超え

意味に縛られすぎないよう
必然に縛られすぎないよう
偶然は訪れる

偶然は意味を超え
秩序を超えているが
無秩序ではないのだ

流れる水はたえず変幻しつづけ
常なるものはなにもないが
水は流れ続ける

輪廻に縛られてはならず
やがて超えられねばならないが
輪廻を超えた永遠は展開し続ける

我は連なりつつ
もとの連なりを超え

mediopos-865
2017.3.29

■藤村安芸子『石原完爾----愛と最終戦争（講談社学術文庫　3017.3）

「石原は、「大正デモクラシー」とよばれる、様々な思想や運動が新しく登場する時代の中で、国家と真理の関係について、人生における戦争の意味について問うた。その結果、仏教の語る真理にもとづき精神的に世界を統一し、絶対平和をめざす日蓮主義に到達する。そこでめざされた絶対平和とは、石原にとっては、人と人のかかわり、また人と自然のかかわりを堅固なものにすることであった。その実現に向けての道のりに、愛と戦争が位置づけられる。

　石原の思想は、人生について根本から問おうとする、一つの哲学であった。しかも理念的に思考するだけではなく、そこから実践を導き出そうとするものであった。では、その理念と実践の接点はどこにあるのか。解く鍵は、石原がうつろい続けたということ、すなわち、歩兵として「歩き」続けたことにある。」

「石原の哲学は、世界が有限であることが、人と人のかかわりにどのようなかたちをもたらすかを、徹底して追求したものであった。その到達した地点は、ある意味で、現代の私たちの抱える問題と、通底するものがある。たとえば地球環境問題などは。まさに限りある資源としての世界を問うものといえよう。それに対する解決方法は、石原に従えば、自らの立つ地より糧を得ることであった。あるいは石原の思想に即して平和をとなえるなら、物は移動せず、人は糧を求めては動かず、他の人に会いに行くためにのみ移動するありようとなる。それに対して現在は、ちょうど逆の方向に進んでいると見なせる。人はいながらにして世界中の情報を手にすることをめざし、一方で物の移動はますます地上のすべてを覆いつくすものとなっている。このような視点から石原の思想をとらえ返すことも可能だろう。

　石原の哲学は、その根本において、眼前の他者とのへだてをいかに埋めるかという問いによって支えられたものであった。人が、有限なるこの世界で、はかない身という限界を背負い、どこまでも生死を超えた結びつきを築こうと願うとき、一体どのような軌跡をたどるのか。（・・・）石原の哲学において、世界の全面的な戦争を導き出したのが、有限性の発見とこの世での成就の追求にあったことを思うとき、近代が決定的に彼方を見失ったことのもつ意味が、改めて重くのしかかってくる。うつろい続けた石原の最後の選択は、自らが生を受けた地に戻り、その地にとどまり続けることであった。それこそがおそらく、彼方の消失を引きうける一つの形であったと思われる。」

彼方へ
決して届かない彼方へ
歩き続ける

平和へ
決して届かない平和へ
歩き続ける

自然へ
決して届かない自然へ
歩き続ける

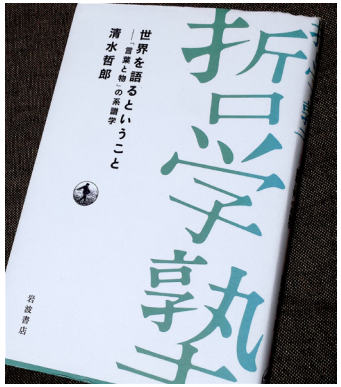
汝へ
決して届かない汝へ
歩き続ける

求めても求めても
求めるほどに
遠ざかる場所へ

けれどもその場所は
いつも後ろの正面で
私をずっと見続けているのだ

mediopos-866
2017.3.30

■清水哲郎『世界を語るということ／「言葉と物」の系譜学』（双書 哲学塾　岩波書店　2008.1）



「人間が言葉と振る舞いのやりとりをしながら生活をするようになった時以来、かつ、その言葉と振る舞いのやりとり自体を言葉で語るようになり、「なぜ・どうして」という問いが成立して以来、人間はロゴスなしには生活できなくなってしまっているのです。ここで、基礎となる言葉と振る舞いのやりとりという次元に対して、それについて問いかつ語る、あるいはその語りについてさらに問いかつ語る、というようにロゴスは基礎次元に対して階上のメタ次元のものです。そこで、そういう場所でしばしロゴスは現実から遊離して暴走を始めます。いや現実から遊離することも、ある場面ではプラスの性格であって、そのような現実を離れて飛翔することが人間の知を豊かなものにしてきたのでもあるわけです。でも、しばしばその現実無視のロゴスが、人々の言葉と振る舞いのやりとりを通しての豊かな、そして信頼に満ちた生活を侵してきたことも確かでしょう。」

人間は理性的な存在だと言われます。この場合「理性」というのはまさにロゴスを備えたものであって、物事の構造＝理をきちんと捉え、それに対して理屈の通った対応ができるといったことを含意しています。このような人間理解を前提として、さまざまな場面における人間のとるべき態度やすべきことが決まっています。しかし、人間をこのように理性的な存在であるとするのは現実に即したことというよりは、現実の一面を抽象したものであって、その際に捨象された（切り捨てられた）面が実践に際して無視されると、困ったことになります。」

言葉が光なら
光は影を生む

光は照らすが
光は見えない

光を見ようとして
光の影を見る我ら

言葉は照らすが
言葉は見えない

言葉を見ようとして
言葉の影を見る我ら

理は照らすが
理は見えない

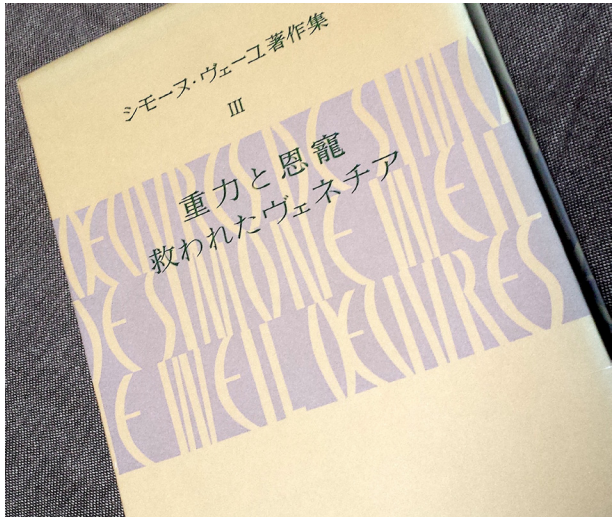
理を見ようとして
理の影を見る我ら

物は照らすが
物は見えない

物を見ようとして
物の影を見る我ら

mediopos-867
2017.3.31

■シモーヌ・ヴェイユ著作集Ⅲ『重力と恩寵・救われたヴェネチア』(渡辺義愛・渡辺一民訳　春秋社　1968.5)



(『重力と恩寵』より)
「魂の本性的なうごきはすべて物体の重力の法則に類似した法則によって支配されている。恩寵だけは例外である。」
「超本性的なものが介入しないかぎり、ものごとは重力に従ってはこばれることをいつも予想していなければならない。」
「二つの力が宇宙を統御している。光と重力と。」
「重力がすこしも加わらない運動によって下降すること・・・・・・重力は下降させる。翼は上昇させる。翼の力が自乗になったところで、重力なしに下降させることができるだろうか?」
「創造は、重力の下降作用、恩寵の上昇作用、それに自乗された恩寵の下降作用とから成り立っている。」
「恩寵、それは下降の法則である。」
「低くなること、それは精神の重力に対して上昇することである。精神の重力はわれわれを高いほうへ落とす。」

人が地に立つとき
精神は逆立ちしている
精神の重力は
高い方へ引かれるからだ

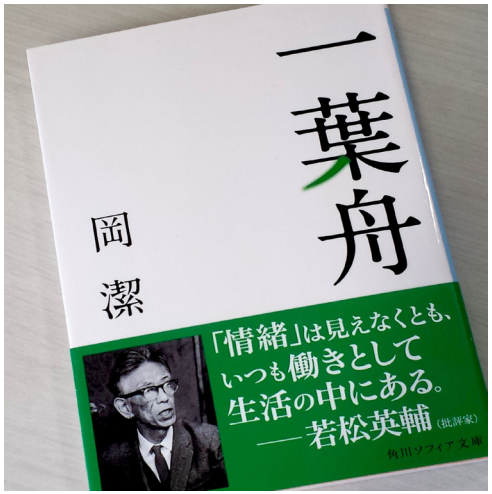
人が自らを高くするとき
精神は低められる
自らを低くするとき
精神は高められる

人は地にありて
歩まねばならない
重力のもとに
けれども重力に抗しながら

人は翼を持たねばならない
精神という翼を
けれどその翼は
恩寵なくしては得られない

mediopos-868
2017.4.1

■岡潔『一葉舟』（角川ソフィア文庫　平成28年3月）



「人はたいてい自然以外に心というものがあると思っている。しかし、自然といえば人の肉体も含まれるから、心は自然の中にあると思っている。それもあちらこちらに閉じ込められて別々にあると思っている。ところが仏教では、心の中に自然があると教えているのである。しかも、こんなふうなぐあいにである。心の中に自然があること、なお大海に一⊠の浮かべるがごとし。自然の中に心があると思おうと、心の中に自然があると思おうと、どちらでもよい訳であろう。ところが、明治以降の日本人は大体西欧の習慣に従ってものを見ているから、前者を理性的と思い、後者を宗教的と思うのである。

　私は十五年前までは、自然の中に心があると思ってきた。今は心の中に自然があると思っている。

　前にどちらと思ってもよい訳であるといったが、この心は刹那の現象として自然を現しているのであって、これが自分の心だということになると、そのあとが実はたいへんなのである。」

「たいへんなのは、この心の整理がたいへんなのであって、それを自然に即して説明しようと思うのであるが、それには道元禅師の「正法眼蔵」から言葉を借りるのが一番よいと思う。

「直趣無上菩提、しばらくこれを恁麼といふ。この無上菩提の体たらくは、すなはち尽十方界も無上菩提の少許なり。さらに菩提の尽界よりもあまるべし」

　恁麼とは未知数 x というような意味である。これでこの心には一大中心があることがわかる。そのつもりでこの心を整理しなければならない。」

「この心の全体を調和させようとするとたいへんである。上には限りがないが、一応のところまで行くに、どれくらいかかるかと思って、ちょっと計算してみた、大体千六百年くらいらしい。」

自然の中に心があるならば
心は自然に抱かれながら
それに依って生きることもできるだろう

心の中に自然があるならば
自然は心しだいで
調和することにも
荒れることにもなるだろう

巧みに手綱を操れるように
心を操ることはできるだろうか
風ひとつない湖面のように
心を鏡にすることはできるだろうか

心は小さな笹舟のように
流されるままただたださまよい
その心の中にある自然は流されてゆくばかり

mediopos-869
2017.4.2

■エヴゲーニー・ヴォドラスキン『聖愚者ラヴル』（日下部陽介訳／作品社　2016.12）

「「変なことを言います。僕には、時間は存在しない気がしてならない。この世のすべては時間を越えて存在する、さもなければどうして僕にありもしない未来のことがわかるのでしょう。思うに、時間は神の慈悲により、僕たちが混乱しないように与えられているのではないでしょうか、なぜなら人間の意識はすべての出来事を一時に取り込むことができないのです。僕たちが時間に閉じ込められているのは自分たちの弱さのせいです」
「つまり、あなたの考え方では、世界の終わりももう存在していることになるが」アルセーニーが聞いた。
「否定はしません。現に個々人の死は存在する-----それは個人的な世界の終わりではないでしょうか。結局のところ、普遍的な歴史-----それは個人の歴史の一部にすぎない」
「逆も言える」少し考えて、アルセーニーが言った。」

時の輪はまわり
死と生はめぐり
過去は未来へと
未来は過去へと
始めと終わりは
つながりもつれ

我ら刹那を生き
刹那を案じる者
時の輪のなかを
よろよろと歩き
世界という謎に
彷徨い行く者よ

mediopos-870
2017.4.3

■吉武泰水監修・杉浦康平編『円相の芸術工学』（神戸芸術工科大学レクチャーシリーズ　工作舎　1995.9）

（岩田慶二 LectureVIII【円相の人類学、あるいは円相の中の時空】「ここがそこであり、生と死が同時に見える場所の不思議」）より
「円相あるいは閉じた空間の中には、ふつうのわれわれの言葉では語り尽くせない、言葉の届かない世界が潜んでいるのではないかと思います。そこはここだ。ここがそこだ。あの時はこの時だ。この時があの時だ。ーーーーどうも時空間が違ったふうに表されている。時空が目もりのついた座標ではなく生きものになって立ちあがってくるようです。私はそういうことがどうしてもあると思いますし、そういうふうにものが見えたら、われわれの活動する世界がずっと広く、ずっと豊かになるだろうという予感がします。予感というと未来に属しますが、この場合は今、いや、時を超えているのです。」
「「生」と「死」が「生死を超えた世界」に包まれているのです。矢は生から死へ向かって飛んでいく。しかし、じつは「生死を超えた世界」のなかで、ゆらゆらしているのかもしれません。飛んで飛ばず、小鳥は落ちて落ちない。その世界には同時という窓がいっぱいあいているのです。矢が、そして生死が、この穴を通り抜けていく。そのとき、銀河鉄道に乗るかどうかは別にして、ゴーゴーゴーゴーと別の世界へ入っていく。「同時」の世界へはいっていく。時間のない世界、因果を離れた世界です。
　たしかにそういう異次元の世界があって、妖怪変化とかに出合うのもありますが、そういう異様な出来事の中でもっとも異様でおもしろいのは、やはり同時。それは円相の空間に秘められていてる時空の本質ではないでしょうか。そこでは、内部が外部になり、生と死が入れ替わり、そこがここ、あの時がこの時、そういう時空の本質が露呈しているのです。」

心
深まりて
円を成す

移ろう時
点は
ここから
そこへ
水平に動くが

深まる時
点は
こことそこで
垂直化し
同時を描く円となるのだ

点
深まりて
円を成す

生と死も
その深みのなかで
同時化し
円のなかにある

mediopos-871
2017.4.4

■クリシュナムルティ『生と覚醒のコメンタリー１／クリシュナムルティの手帖より』（大野純一訳　春秋社　1984.9）

「「あなたはマスターは存在せず、したがって私が弟子であるというのは幻想であり、作り話にすぎないとおっしゃりたいのですか？」
　マスターが存在するかしないかは、取るに足りないことがらである。それは、利用者たち、秘密流派や秘密結社にとっては重要である。しかし、至福をもたらす真理を探究している者にとっては、この質問は、明らかに的はずれである。マスターと弟子の区別を重視するのは、金持と苦力（クーリー）の区別を重視するようなものである。マスターが存在するのかしないのか、イニシエートと弟子等々の区別があるのかどうかといったことは、重要ではないのだ。肝要なことは、あなた自身を理解することである。自己認識がなければ、あなたが何を考え、何を論証しようと、いずれも何の根拠もないからである。まずもってあなた自身を知らないで、どうしたあなたは真理を知ることができようか？　自己認識がなければ、幻想は避けられない。自分がこれこれだということを他人から告げられ、そしてそれを受け入れるというのは、幼稚なことである。この世や来世での報いをあなたに申し出るような人間には、用心したまえ。」

報いは
みずからが
みずからに与える

醒めていることだ
たとえ熱狂しているときでさえ
みずからを見つめることだ
幻にかき乱されるときはなおのこと

教える者は
みずからに教える
教えられる者は
みずからを教えない
ただそれだけのことが見えないまま
生から覚醒が取り去られてしまうのだ

mediopos-872
2017.4.5

■川上貢一『インナーメッセンジャー』（ナチュラルスピリット　2017.3）

（「数について」より）
「あなたとわたしという「ことば」は分離を前提に使われる
　だから「それはふたりではなくひとりなのだ」という訂正を常に要する
　またひとりとは「１」を意味しているが
　この「１」は同時に「２」や「３」でもあり
　同時に他のいかなる数でもあるというように
　数の概念も訂正を要する
　数は投影された分離の世界でのみ有効な限定的かつ暫定的な概念
　他のすべての物質的存在の基盤であるとはいえ　それ以上ではない
　あなたが「数」を作り出したのだ
　いつでも重要なのは　すべてを作り出し維持している
　あなたとわたしの「力」を認識しなおすことだ
　「その力は何のためなのか」
　これは常に自分に確かめる必要がある
　その力を何に使うかは完全にあなたの自由なのだから」

７つの穴をあけると
死んでしまう混沌のように
１が２になることで
失われてしまうものがある

分かることで
分からなくなることがあり
することで
失われてしまうものがある

世界は矛盾に満ちているが
それも矛と盾を分ける力が
つくりだしたものなのだ

みずからの混沌を殺すことなく
力を得るにはどうすればよいのか
さあ言え！
さあ言え！

＊「さあ言え！さあ言え！」禅の公案より

mediopos-873
2017.4.6

■大岡信『詩の日本語』(中公文庫 2001.1)
■『自選　大岡信詩集』(岩波文庫 2016.4)

「「花」という言葉は、どれほどその重要性を主張しても主張しすぎることのない「日本的美意識」の鍵をなす言葉であろう。」
「「あの役者には花がある」とか、「あの人は花のある人だ」というだけで、すでに多くのことが語られてしまうのが、「花」という語のふしぎさだった。「雪月花」とか「花鳥風月」とかの語は。すでに陳腐以外の何ものでもない定まり文句となりはてているが、にもかかわらず、少なくとも「花」の語は、私たちの生活の中で、豊かな含蓄ある語として用いられうるし、げんに用いられている。」
「「花」といえば桜を指すことに暗黙の了解が成立したのは平安初期のことだろう。奈良から都が京都へ移って一世紀足らずの間に、どういう経過をたどってか、その常識が人々の間に根をおろした。」
「「花の宴」という行事がこの変革にあるいは深く関わっていたのかもしれない。」
「つまり奈良朝の花の代表たる梅が平安期では桜に地位をゆずるにつれて、宴も梅花の宴から花（桜）の宴に衣替えしていったことになる。」
「花の宴は同時に詩歌管弦舞踏の宴であった。その後久しいあいだ、春たけなわの三月はじめになると、紫宸殿を中心に花の宴が重要な行事となる。
　こういう形で、「花」は詩歌の世界でも最重要の文明的・文化的象徴性を帯びた景物になっていった。それは、桜の花がそうなっていったことであると同時に、「花」という語そのものがそうなってゆくことであった。」

春は花
花の時

時は宴
宴の舞

舞う心
心の歌

歌う鳥
鳥は空

空は蒼
蒼い光

光る風
風の声

声の色
色は春

★追悼、大岡信
詩人の大岡信が亡くなったそうです。８６歳。大岡信の『詩の日本語』と『大岡信詩集』を弔辞としてのポエジーにしてみたいと思います。春、花の時でもありますので、そのテーマで。

mediopos-874
2017.4.7

■山本哲士『吉本隆明と『共同幻想論』』(晶文社 2016.12)

「国家は、国家だけで統治をしません。「社会空間」を構造化して種差的な社会界を多様に vision/devision の原理において編制し制度化することによって、はじめて近代国家を編制しえるのですが、それは資源や食料が「欠如 scarcity」していることにたいしての対応としてなされていき、それが健康や衛生の欠如、教育の欠如への統治制としてなされて国家形成されていきます。フーコーが scarcity の概念をもって生権力・生政治から統治制 governmentality へと考察が進められたのが「安全・領土・人口」の講義がなされたときです。同じ頃イリイチは、「scarcity の歴史」へと考察をすすめます、そしてブルデューは他律性と自律性の闘争にかかわる国の象徴権力・象徴暴力の考察へとすすんでいきます。一九八〇年代をはさんで、権力論と国家論との新たな問題構成闘が出現したのです。諸個人への個人化する働きかけが、集団・人口総体への働きかけとして同時的に考察されることで、個人化が個人を喪失・無視していく仕方となって転倒構成されるあり方が名証されたのです。逆立が転倒同調とされていく様態です。すると、ブルデューが示したように、国家の客観的な構造は、諸個人の認識構造と一致して内在化されていき、認識カテゴリーが国家によって形而上学的に収奪されている構成が成り立つことになります。家族がある、学校がある、医療が病気を治してくれる、税金は払うものだといったことは、社会的恣意が自然化されたものでしかないのに、疑われることなく当然のものごととして生活でキャッチされ、日々の社会生活において行為されていくのです。」
「統治心性は、共同幻想への従属・受容の心性であり、また民衆のために統治するという支配統治者の心性です。ニニギが葦原中国を統治する主だとされたことです。スサノオは海原を統治せよといわれて哭き叫びましたがニニギは従いました。ここが日本における統治心性の幻想的起源です。アマテラスが岩屋に閉じこもったとき集まった神々は岩屋戸を開けて葦原中国に光をとりもどす統治技術をなすことを意味しています。(・・・)統治技術は、祭祀から軍事そして政治へといきますが、「知らしめる」ことから「知行」へと統治制が構成されていきます。その累積が、「お上」に従う統治心性として自然化されていったといえます。幻想はそれに支えられて普遍化していきます。」
「飛躍しているように感じられるかもしれませんが、その根拠は「国つ神」が不在だからです。「国つ神」は場所の自分自身の幻想疎外です。それが葦原中国幻想へ鉤止めされたままなのです。その葦原中国=社会幻想には、天つ神幻想さえもない、高天原幻想も無い、天つ神や高天原はいんちきだと、無意識に目覚めている幻想形態です。それが<国家>幻想にぴったりと従属しているのです。つまり、共同幻想の本質形態が共同幻想から消失されているという共同意志の働きがなされている。それが「社会幻想」から日常化されている事態になっています。子どもは、学校へ行くか行かないかで、自死にまでいたってしまうような働きをさせてしまう幻想です。大人は自死にまでいたらずとも、「諦め」としてもってしまっている幻想従属です。医者に通っていれば病気は治ると老人たちがおもいこんでしまって身体萎縮してしまっている幻想です。幻想収奪、認識の形而上学的収奪、メタ言説の編制だと、わたしは把捉します。」
「商品幻想と社会幻想をむすびつけているのが、「最低限のよりよいものをより多くの人に」の原理です。これは市民社会の権利原理であり、サービス・商品経済の生産普及原理でもあります。それは「均質」の「画一」空間を、平等・均等のビジョンにおいて編制することになります。この広がりをもった均質・均一空間の幻想起源が「葦原中国」共同幻想だとは既に指摘した通りです。現在では、どこでも同じ商品が行き渡るように、また同じく、どこでも規制は同じであらねばならないという統一・統合になります。さらに、ものごとの思考形態が「一般化」していきます。固有さ創造性は逸脱だとみなされます。さらに、ものごとの思考形態が歴史のなかにも逆投影されてしまっています。社会はしかし<場所>ではないのです。社会は「場所」を「地方」として蹴落とし、劣ったものとして価値剥奪してきたのです。」

スサノオは海原で叫び
ニニギは葦原中国で微笑んでいる

人が場所を失って久しい
場所の代わりに
国家や社会という仮面が
場所の顔をしている

均質で画一化された
平等で均質な空間で
家族が学校が
病院が税金が
幻想であるにもかかわらず
あたりまえのように微笑んでいる

それは国家主義であれ
市民主義であれ
強者であれ弱者であれ
変わらない幻想なのだ

幻想は与えられながら
密着した皮膚のように
自己同一化されたものとして
みずからを覆い縛っている

それに気づいたものは
幸いなのか不幸なのか
それはわからないが
スサノオは叫び
ニニギは微笑んでいるのだ

mediopos-875
2017.4.8

■新井紀子「「ダメなＡＩにならないために」
(『考える人』2017 年春号　最終号　所収)

「「コンピュータとは何ですか？」と聞かれたとき、コンピュータの画像を示すようなＡＩは作れます。だから文章の意味は画像に埋め込めばいいという議論があります。たとえば「机の上にリンゴがあります」という文章の意味をＡＩに聞くと。机の上にリンゴがのっている画像を表示したら。ＡＩは文章の意味がわかっているといえるのではないか、と。でも､それではすぐに限界がくる。「考えるとは何か､について考えようと思う」のようなものは画像にしようがないから、何に埋め込めばいいかわからない。自然言語処理は、画像認識とは違う難しさを持っています。文や図があったとき、それが何を表しているかという「意味」に対して、それはこれを表しているとマップする理論が数学にはない。数学として方法論がないから、コンピュータで実装できない。

　つまり、今あるＡＩに意味はわからないのです。「意味とは何か」は数学では表現できないから・すべてのＡＩのプロジェクトは、統計と論理を用いて、「意味がわかっているフリをする」、あるいは「意味がわかっていることにする」可能性を探っているのです。」

「戦後教育が七十年になって、学力調査も入試もさんざんしているのに、誰も子供たちが教科書の文章が読めているかどうかを調べていなかった。それは日本だけではなくて、他の国も調べていなかった。読めている前提だったのでしょうけど、考えてみると、読めているのなら妙なのです。どうしてこんなに新聞や雑誌が読まれなくなったのか？　トランプさんが言っていることがこんなに矛盾していても、どうしてみんな平気なのか？　考えてみればみるほど、読めていないのでは、と疑うべき現象がある。

　そこで、今、どのぐらい読めていないかを調査しています。」

「この子はこのぐらいまでしか読めていない、ここでひっかかっているというのがわかったら、それ以上は読めないのだから、教え込むのではなく、読める状態にしないといけない。「意味はわからないけれど、とりあえずやります」というときの人間は､ＡＩ､それもダメなＡＩっぽくなる。(･･･)少なくとも中学校の教科書が全部読めてわかる状態になっていれば、それぞれの興味に従って本も新聞も読めるし、ウィキペディアも読める。」

わからないことを
わかろうとしながら
どこがわからないかを
わかったうえで
わかったふりなんかしないで
わからないといえる

わかった気になんかならないで
わかっていないかもしれないと
なんどもなんどもわかろうとする
問いに答えることができたとしても
じぶんで考えたことかどうか問い直す
なぜその問いがあるのかを考えてみる

書かれてあることがわかったとしても
書かれていないことがなにかを考え
もういちど読み直してみる
書かれていないこと
教えられていないこと
それを問うことができるかどうか
それが人間であることの証明になる